
魔法先生ネギま！－最終幻想の魔法使い－

真っ白い布

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！—最終幻想の魔法使い—

【NNコード】

N8294T

【作者名】

真っ白い布

【あらすじ】

注意！ これは感化されやすい作者が書いた駄文です。

転生、主人公最強の最低モノの要素が入っているだけでなく、処女作、国語力〇などの要素も入り作者の妄想のはけ口となっています。

それでも構わないという人のみ読んで下さい。

タイトル変えました

序話（前書き）

今更ながら序話投稿です。
指が進まない……。

序話

あるところに一人の青年がいた。

その青年の容姿は黒髪黒目、平凡と地味といつて文字がよく似合つ容姿だ。

「何かすつげー目立たないつて言われてるよつな氣がする……」

……地味に勘はいよつだ。地味なくせに。

「何だろ。めちゃくちゃ腹立つ。」

この手の話題に関しては鋭くなるよつだ。地味なくせに。

そんな青年は今、学校の帰りで、夕暮れの道を独りで（誤字にあらず）歩いている。

地味属性に加え、ボツチ属性もあるよつだ。
可哀想に。（嘲笑）

「見下された視線のよつなものを感じる……」

しかし、青年には、地味属性、ボツチ属性に加え、もう一つ悲しい属性があつた。

それは、

ブオオオオ…………ドンッ！

「へ？ ちよ、うう」わっ！？

居眠り運転をしたオートバイに引かれると言つ。何ともレアな死に方をするという不運属性だ。

「…………俺の人生こんなんばつか……グフツ」（バタリ

○○○○○○○○

「死んだと思ったら何故かDFFの聖域に居たんだ。不思議なこともあるもんだね！」

と、この様に先刻引かれてしまつたジミー君は何故かDFFの聖域にいて絶賛パニック中だつた。

……足が無いのは御愛嬌だ。

「あつはつはつはつはー（ジゴツー）ん？」

脳の許容量をかなりオーバーしてぶつ壊れていたミスター・ジミーは何かを殴るような音に気がついた。

「な、何の音だ？」

と、ザ・ジミーは軽くビビり入つた調子でその音の方に向かつて

みると、そこには！

「貴様はつ！人のつ！気持ちをつ！考えたことあんのかあ！」

ドゴツ！バキッ！ゴシャツ！メリツ！

「がぶつ！ふつ！べふつ！ぶふつ！」

右フツク、左フツク、アツパークット、掌打という流れるようなコンボをキレイ系な美女が、銀髪のイケメンに叩き込んでいた。

「……うん、意味分からん」

展開が速すぎてついていけないようだ。

（単に作者の力不足です。すいません。b y 作者）

「力ス作者め……」

（何でこれだけ聞こえんの！？ b y 作者）

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア！
！――！」

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガツ――――――！

「ほつといたらミンチになりそだしそうだしあえずあの私刑を止めに行こう……怖いけど」

（数分後）

「いや、いやあ助かったよ。止めてくれてありがとうね。」

ひわひきまでシバかれていたイケメン銀髪は言ひつ。もつとも殴られすぎて顔がかなり歪んでいるが。

「は、はあそうですか」

「いやー、でもホントに危なかつて」「ねえ、ロミコホ

ビクウー

「は、はいジユリエル様！なんで御座こましょつか！？」

「わつわと話しておいたほうが良いんじやないの？」

ジユリエルと呼ばれた金髪の女性が、ロミコホと呼ぶださつあまで話していた銀髪に言ひつと、

「あー、やうだつたね……じゃあ、本題に入らうか

その言葉を聞いてジユリエルは表情を少しあわせ、姿勢を整える。

「まあ話すと戻くなるから簡潔に言ひつよ。」

「へ？あ、はー」

そして、銀髪はひづいた。

「僕と契約して魔法使いになつて世界を救つてよ（キラッ）

「…………は？」

「僕と契約して魔法使いになつて世界を救つてよ（キラッ）

「いや、ワケが分からなじよー」

「だーかーらあ、僕と契約して魔法使いになつて世界を（ドバキヤツ！ー）がぶふつーーー」

三回目は金髪さんにシバかれて言えなかつた。

「あの『』にもある物体のことは忘れてくれて構わないわ。後は私が説明するから」

声が平淡すきる。

「は、はー！（めつちやー）えーーー」（ガクガクブルブル

～金髪さん説明中～

「えーと、要約すると

・俺は天命で死んだ。

・あの銀髪さんは不本意であるが神。

・金髪さんも神。

・あの銀髪さんは間違つて悪意の欠片とか言つたのを世界とかいつとひにぶち込んでしまつた。

・そりでちよつとよく俺が死んだ。

・神は世界に原則的には介入しちゃだめだから俺にやられせちやおうーと勝手に銀髪さんが決めた。

・その事を金髪さんが聞いて銀髪さんをミンチにしようとしました。

・その途中で俺乱入！

……こんな所ですか？

「うん、まあ大丈夫ね、もつと書つとあいつは貴方の了解無しで無理やり送りうとしたわ

「うわあ、止めなきやよかつた

あの銀髪（以下、ゴリ）はヒドークズだつたらしく。

「ヒシーハード（バギャー）おぶつー！」

「黙れ、喋るな、口を開くな、皮を剥ぐぞ」

「何故ー？」

「あのー、それで俺はどうなるのでしょうか？」

地味之助は「」に對して完全なる無視を決め込んだようだ。

「つーか、わざわざから地味地味言われてるよつた氣がしてならな
い件について」「

「どうしたの？」

「いえ、何でもありません」

「そう、じゃあ貴方の処遇についてね、今貴方には2つ選択肢が
あるわ」

「一つはそのまま輪廻転生の輪に入つて転生する。この時は記憶
も無くすわ。」

「そして二つ目は悪意の欠片を壊すために転生する。この場合は
記憶もあるし、特典も付くけど悪意の欠片に戦つてもうつわ

「もし、戦わなかつたら？」

「その時は世界から生き物がいなくなると思つてくれて良いわ
他の人も勝てないんですか？」

「勝てる人も居るけどかなり限られてくるわよ」

「まあ、二つちでもサポート位ならできるから…ひとつと転生
しちゃ（メリゴチ…）ぶぶつ…」

「自己保身しか頭にない」「」は黙つてて、とこうか死ね

金髪さんの蹴りが、「！」クリティカルヒットした！

「全く汚いわしい。バイオ兵器よりたちが悪いわ」

「くくつ、何かに目覚めそつだよ……」

「…………キモツ」

金髪さんは本氣で気持ち悪い物を見てしまったと言いつた顔をしていろ。

「はあはあ……」

「それで、どうするか決まった？」

金髪さんも無視を決め込んだようだ。

「はあはあ、放置プレイ……」

「うーん……、よし、後者でお願いします」

「……本当に良この？半端な覚悟だとすぐ死ぬわよ？」

「それでも、いいんです。確かに苦しいかもしねないんですけど誰かがやらなきゃいけないんでしょ？」

「それはそりだけど、まつきつぱつやえぱよほじうどこ人じやない限り誰だつて良このよ？」

「「つーん、まあ普通に考えたら嫌ですけどね、

「こんな約60億分の1の転生のチャンスを逃すほど奥手じゃありませんし」

「そう黒髪の青年（性格が少し地味じゃなかつたので評価が上がつた）が言つと、金髪さんは溜め息を吐き、

「分かつたわよ。全くそんな堂々と聞こえきられたうじつじつもないじゃない」

「ホントですかーー？」

「ホントよ。それで？3つまでだけど特典をあげるわ。因みに行く世界はネギまーで、時間軸は大戦期よ」

「ネギまですかーー？」

「あ、因みにどんな特典かによつて悪意の欠片の形とかも変わるから」

黒髪の青年は少し考えた後

「んー…………よし！決めた！」

「を！決めたの？どんな能力？どんな特典？蒼の魔道書？マスター＝ゴニシトアマテラス？斬神？」

「何で全部ブレイブルー関係なのよ」

「ファイナルファンタジーの魔法全部と、魔力ほぼ無限で！
後は、身体能力を上げて下さい」

「なあ、ファイナルファンタジーよりブレイブルーに（ドゴッ）
ギヤッ！」

金髪さんのハイキック！

きゅうじょ（後頭部）にあたった！

「自分の希望を押しつけるなゴミが」

「…………」

「ゴミは氣絶していた。そもそも

「あのー、チート過ぎたでしょーうか…………」

「ん？ああ、全然大丈夫よ。私的にはこのゴミをどう苦しませて
殺るかというアイデアが欲しい所ね、何かない？」

「ゴミのことはなにして。一秒も考えたくありません」

「それもそうね」

「の二人は結構相性が良いよつだ。」

「さて、特典も聞いたことだしそろそろ転生をさせよつか」

金髪さんがそう言い黒髪の青年に光を纏わせた

「特典の付加は転生している時にするわ。一応修行できる場所に
送つておくから」

「何から何までみません」

「このくらい大丈夫よ
……そろそろね。では、良い生を…」

そして黒髪の青年は光に包まれその場から消えた。

序話（後書き）

魔法の説明ついていりますかね？

一話目（前書き）

文が気持ち悪い等があります。
そして、初っ端から超展開です、
注意なさい下さい。

6月25日改変しました

ある、荒野に轟音が響く。

そして、その荒野にいたのは。

ヒト、ヒト、ヒト。

まるで野原にある草のよつな、

川を流れる濁流のよつな、

大量のヒトがいた。

そして、そのヒトの大群は互いに争い合っていた。

剣で斬られる者。

銃で撃ち抜かれる者。

魔法で焼かれる者。

様々なヒト達が様々な殺され方で殺されていた。

そして、そのヒト達が挙げる、断末魔、悲鳴、呪詛、呻き声に反応するかのように蠢く、黒く、暗いナニカが在った。

そのナニカは負の感情が籠もった叫び声が、呻きが、吐かれると同時に、

少しづつ、しかし、確実に大きくなり、大きくなると同時にヒトの形を作つてゆく。しかし、争い合つてゐるヒト達は気付かない。

そのような正体不明かつ、見てゐるだけで歪だと感じられるようなモノなのにも関わらずだ。

しかし、それは仕方のないことも言える。何故ならそれは、この世界に現れたイレギュラーであり、ヒトの悪意そのものだからだ。

そして、その悪意は形作られ、美しい銀色の髪、ローブのようだが、腹部や、太ももが露出した服、そして、中性的な顔立ちだが、サディスティックな光を宿した瞳をした、青年となつた。

その、青年の名は、クジヤ。

かつてある世界で大国の女王をそそのかし、ガイアと呼ばれる世界に戦乱をもたらした者だ。

そして、彼が形作られた時には、ヒトの形となつた悪意は一人のヒトとなり、他のヒトにも気付かれるようになる。

「誰だ！－貴様！－」

問われたクジヤの口角は上がりサディスティックな笑みを浮かべる

「誰だつていいじゃないか。どうせ君たち・・・・・

ここで死ぬんだしねえ！」

悪意が真似たのは何も形だけではない。

破壊活動に不必要なモノを全て制限して、真似たのだ。

つまつ

ପ୍ରକାଶକାଳୀନ

フレア

一一七

有象無象では、足止めは愚か、ただの的にしかならない」と云ふことだ。

いいね、もうと君たちの悲鳴を聴かせておくれよ。」

一連弾ホーリーボール

ズドォン！！ズドォン！！ズドォン！！

光球を大量に降られ、今まで争い合っていたヒト達は為す術もなく逃げ惑う。

必死になつて逃げ惑え！…もつともつと生きていたる姿を見せておくれよ！！」

ズドォン！…ズドォン！…

○○○○○○○

所は変わり、惨状となつてゐる戦場より少し離れた場所で、歳は10歳位であるつか、一人の少年がその戦場を厳しい目で見ていた。

「遂に来たか・…・…」

その少年はまるでその惨状が起つた事を識つていたような口振りで言つ。

「はあ、3年しか修行出来なかつたぜ」

その少年は心底面倒そつた口調で言つ。

「でもまあ、来ちまつたもんはしちうがないか」

「それで、『ドビュー戦だな。
いつちよ、勝つてくれるか…!』」

そう言い終えた少年は、文字通り、飛んで行つた。

○○○○○○○

「はあ、全く期待外れだよ。
もう少し粘ってくれるかと思つたのに」

「だつたらよ、俺と戦ろ! ヤ」

「ん?」

ズドオンー!

クジヤの上空から声が聞こえた瞬間にクジヤから少し離れた場所
に少年が着地した。

「よつとと、着地成功と」

その少年を見た瞬間クジヤの目は少し見開かれ、そして、ゆっくり

りと口角が上がつてゆく。

「へえ・・・・・・・。

君、小さじけど強そうだね。」

「そりやあどつも」

「君は楽しめそうだね。

名乗つてあげるよ。僕の名前はクジヤだ」

それを聞いた少年の口角も上がり、声高らかに言つ。

「良いね、そういうの、嫌いじゃない

俺の名前はハ咲悠介。

お前を倒す転生者の名だ！！」

そして、クジヤと少年・・・いや、悠介の魔法がぶつかった。

設定紹介

八咲悠介

性別 男

年齢 10歳（現在）

黒髪黒目

平凡を表現したような顔立ち

・能力

ATK : B
MAG : A
DEF : A
LUK : B
SPE : B +
MP : [*]

「*」ネギま！の魔力は雀の涙程しかないが、
FF魔力だとEXとなる。

・アビリティ

- ・身体能力UP : S
神から貰った能力。
身体能力を上げる。

- ・幻想の力 : EX

神から貰った能力。

FFに出てくる魔法を全て使えるようになる。

- ・幻想の魔力：EX
神から貰った能力。

FFの魔力を膨大に使えるようになる。しかし、ネギま！の魔力はほぼ無くなる。

- ・サバイバル：B+
サバイバル技術が身に付く。

説明

元はただの高校二年生だったが、天命の交通事故によって死亡。

一回目の生を記憶を引き継いで生きる代わりに、神が間違えて落とした「惡意の欠片」を破壊する命を負った。そしてその時にチートを貰った。

転生直後は7歳だったが、3年修行して大戦期へと移行した。

【マジックインファイター】

拳と魔法で至近距離、遠距離の闘いに対応する。

1 四畳（繪畫也）

「ひにひま。

真つ白い布です。

戦鬪描寫は難しげですね……。

時間すぐつ掛かっちゃいました。

キャラ崩壊あるかもしません。

駄文ですがこの作品を楽しんでいただけたらと思います。

ある荒野に爆音が鳴り響く。

そして、その荒野にいるのは。

銀髪で中性的な顔立ちをした青年、クジヤと

黒髪黒目、平凡を表現したような少年、八咲悠介（以下悠介）だ。

その二人はまるでハチ鳥のように空を駆けている。

一連弾ホーリーボールー

クジヤが周りを舞っている光の玉を悠介の方へ射出すると、

「危なねえな！！オイ！！」

一連弾ファイラー

それと同じ数の炎弾を出し、相殺する。そして、

「凍てつけ！！！」

一連弾ブリザラー

悠介が、十の氷弾を飛ばすが、

「甘いよ

一連弾フレアー

十の炎弾で相殺される。

一進一退、攻守がめまぐるしく変わる攻防が荒野で繰り広げられていた。

「つたぐ、埒が開かねえなあ！」

そう、悠介は「」。

しかし、そう言いながらも、風を超える速度でクジヤに近づき、

「フツッ！」

右ストレートを放つ。が、
クジヤはそれを危なげもなく避ける。そして、

「そうれ、あげるよ」

一バーストエナジー

「ツ……」

フレアによる爆発が悠介を直撃し、5m程吹っ飛ばされ

「綺麗だろ」。

四方八方から質量のあるホーリーボールが迫り、

ドガガガガガガガッ！！

「ガハッ！」

悠介はなぶられる！！

そして、今度は20m程吹き飛ばされる。

「ガッ！グッ…ハッ…。」

そしてクジヤが追撃と言わんばかりに、

一連弾フレアー

フレアを放つ。が、

悠介はそれを黙つて食らうわけもなく、

「そんな何回も食らうかよ！」

一連弾ブリザラー

氷弾を飛ばし相殺し、

「お返しだ！」

一連続サンダラー

大量の雷を落とす！！

バチイ！！バチイ！！バチイ！！バチイ！！

「なつ！ぐああああああああああ！」

雷の一つに直撃したクジヤは苦悶の声をあげる。

そして、痺れて動けない——瞬の隙を突いてケジヤを肉薄にし、

卷之三

そして最後に、

二二二

一纏い・ブライテー

ズドオン！！

足にファイラを纏わせ、
蹴り飛ばす！！

「クツ！」

ズザザザツ！

しかし、流石と言えよう、クジヤは追撃の隙を消すように体制を立て直す。

そして、クジヤは愉快そうに笑う。

「ククツ、君、なかなかやるね」

その言葉に一瞬驚いた悠介だが、

「ははっ、お褒めに『つ恐悦至極』

すぐさまおどけて返す。しかし、

悠介を褒めたように見えたクジヤだが、でも、と付け加える

「その余裕そうな顔が気に入らないよー。

見ていなよ、すぐに絶望に至ませてあげるからさあーーー。」

そう言い放ち、小さな光の球を悠介に向かって飛ばす。

一ホーリースターー

その光の球は悠介の目の前で急激に膨張し、

「ツーーー！」

8の時を描くようにホーリーがその光の球の内側と外側に流れ、

ドオンー！

爆発した。

しかし悠介はその爆発を紙一重で避けていた。

なので、悠介は爆風で体制が整っていない。故に、

「消えて無くなれ…………！」

詠唱を完了させたクジヤの魔法は避けることができなかつた。

一アルテマ一

悠介の頭上から、

「んなこ！」

雨のよみが魔法攻撃力隠し注ぐ

一 シ エ ル 一

それでも苦し紛れにシェルを発動し、ダメージを軽減させようと
するが、

גַּם־הַנְּבָאָה

究極魔法と呼ばれるアルテマと拮抗すらできず、

バリイン！

二二二

容易くシェルによるシールドは碎かれ、

o $T_1 T_2 T_3 T_4 T_5 T_6 T_7 T_8$

アルテマの雨が悠介に降り注ぐ！

「がああああああああーーー！」

「はははははは！ まあアイナーレだ！」

クジヤがそう高らかに宣言した瞬間
今まで降っていた球の3倍はある球が降り、

ズドォン！

悠介に直撃した！

「ぐがあああああーー！」その衝撃で悠介は50㍍程吹き飛ばされれる。

「あつはつはつはつはつは！無様だねえ！」

クジヤの嘲笑が響く

「クツクツ、まあ、結構楽しめたね」

「楽しませてくれたお礼に僕が直々に君の生に終止符ヒツオフを打つてあげるよー！」

クジヤは声高りかじ、そして、まるで演劇をしてこなかのまつに手を広げて言つ。

「さあ、これでおしまいだ。愉しかつたよ」

そしてクジヤが手に魔力を集め、魔法を放とうとするが、

「ハハツ、残念だつたな。クジヤ」

「何？」

ケジャは悠介の言葉に疑問を覚える。しかし、その疑問は直ぐに解消された。何故なら、

「隊伍、星乃」

ズォン！

悠介がそう唱えた瞬間に空が裂け、
巨大な隕石が落ちてきたのだから。

「なつ！ いつの間に！」

実は悠介はシェルを唱え終わつた瞬間から、メテオを発動させる準備を痛みに耐えながらしていったのだ
故に、あの短い詠唱のみで魔法の中では最上位に入るメテオを発動できたのだ。

「じゃあな。クジヤ」

ズツ、ドオオオオオオオオン！――――――！

○○○○○○○○

ドサッ！

何かが落ちた音が聞こえた。

「ぐつまつ、ちゅうと無理しすぎたらしいな

その音の正体は悠介だった。

その小さな体には満身創痍といつ言葉がぴったりな程に似合って、ケアルガをかけていても、まだ危険な状態だった。

「ちつ、正直舐めてたな

その声には少し後悔の念が感じられた。

「まさかあんなに強いとは思わなかつたぜ」

やつ言いながら、悠介のまぶたはゆっくりとがってこく。

「ああ、やべえ何が眠くなつ……てき……た……」

その言葉を言い終えた瞬間に悠介は眠りこ落ちた。

どうでしたでしょうか？

無理やりな所もありましたが、

お楽しみ頂けたでしょうか？

次回はあの入達が出てきます。

それでは。

二四題（詠畫也）

「んにちは。
真つ白い布です。

例の如く短く、駄文であります。

それでもよことぬくなりばじつね。

ある荒野に人影が映る。

その影は小さな集団で、荒野を風のよつた速さで飛んでいた。

「まつたく、何が起つたんだよ……」

その影の集団の先頭を飛んでいる赤髪の少年がそう言つ。

「確かに先刻の光景は異常でしたね」

赤髪の少年が言つた言葉に応えるようにロープをまつた青年が言つ。

「大方、誰かが魔法でも唱えたんだろう」

と、刀を持った男が言つ。それに対し、白髪の少年が応える。

「しかし、隕石を降らせる魔法など、見たことも聞いたこともないぞ」

その言葉にその集団の者達が驚く。

「お師匠でも知らねえのか！？」

「確かに、魔力のうねりも感じられませんでしたし」

「では、あれはいつたい何なのだ？」

そして白髪の少年がもう一つの疑問を口にする。

「隕石が降っていた時には既に両軍の影も見えなかつたのも気になるのむ」

各々が思つたことを言いながら荒野の空を飛んでゆく。

「確かにお師匠が言つたことも気になるな。

よし、そんじゃああの隕石が降つた所に行つてみようぜー。」

赤髪の少年がそう言い、その集団は速度を上げ、空を飛んでいった。

○○○○○○○○

集団が隕石が落ちた場所に着いた。

そこには、一人の少年が荒野に倒れ伏していた。

「！－！オイ！大丈夫か！？お前！」

と、赤髪の少年が問うが返事がない。

「これは……危険な状態ですね、とりあえず近くの町に行きませ
ようか。それにこの少年から話を聞きたいですし」

「そりじゃのう、よし、ナギーその子を持つて行けるか?」

ナギと呼ばれた赤髪の少年が応える。

「当たり前だお師匠!」

白髪の少年はその応えに満足したように頷き、その集団はもと來
た道を風を越える速さで飛んでいった。

○○○○○○○○

s.i.d.eハ咲悠介

「…………ん?」

「何処だここ……。」

「ああ、そりゃ言えれば」「うう状況の時にはこう言えって友達(前世
の)が言つてたな……。」「知らない天井だ……。」

「起きてすぐネタを言える位なら大丈夫ですね」

な
つ
！
！

「誰だ！！」

そういう俺は起き上がるうとするが、

ズギイ！！

「……！」

「ああダメですよ、まだ完治していないんですから」

と言ふ。口ノノを被^シた青年がまた俺を寝かせる

「イツ、心底懲しむに笑ひせかる……」

とか考へてゐる内にロープを被つた青年思い出したように

「ああ、そうでした、私の名前はアルビレオ・イマと申します。」

！――つ――」とは俺は紅き翼に捕まつたのか。

「八咲悠介だ。一つ聞くが、あんたはあの紅き翼か？」

「ほう、私達も有名になりましたね。」

「……私は紅き翼の一員です 他の人達は今せよと出かけてましてね、私は貴方のお守りを任せられたのです」

お守りって……、こせみあ今は年齢的にまだ小二だけビճあ
何か複雑……。

「ふーん、で、それだけじゃないんだ？」

「ほう、察しがいいですね……。」

「当たり前だ。氣も魔力もない子供が戦場に晒るって事自体おか
しい話だからな

「そんで？何を聞きたいんだ？」

「俺があそこに居た理由か？それとも、それとも、
あの……隕石か？」

「！……やはり何か、知っているのですね？」

やつぱり警戒心は高まつたな。
わて、温めておこした嘘を話そつと「帰つたぞ……。」

全員集合か、後被せんな。

「おお……起きたのか……。」

「まあ、おかげ今までな

「なんだ、可愛げがねえなあ

「いや、お主が言える事では無かるつ

「いやゼクト、あんたもだぞ」

「やれやれ、賑やかになりましたね

えーと、確かあの赤髪がナギ・スプリングフィールドで、黒髪メガネが近衛詠春、
んであの白髪がゼクトか、あんまり覚えてないなあ。

「ちよつと良かつたですね。この子が話す所でしたし」

その言葉を聞いた瞬間全員の顔が引き締まる。

「んー、どこから話そうかな……」

○○○○○○○○

「あー、つまりお前は、戦争孤児で、そのままじゃ生きていけないから各地を放浪して、偶然見つけた遺跡にあつた魔導書にその魔法が書いてあって、なんだか導かれるように行つた戦場に同じ様な魔法を使う奴が居て、そいつをぶつ飛ばしたは良いが全身満身創痍になつてあそこに倒れてたつて事か？」

「まあそんな感じだな」

ファイアを浮かべながら言つ。

「なんだか曖昧な所が多くないか？」

「じゃが、ある程度は筋が通つてゐるぞ

当たり前だ、Jの三年間ずっとと考えてきた嘘だ。
通つてなきや困る。

「んー、ヒトヒトせあの隕石打つたのせお前つて事だよな？」

「ああ、そうだが？」

「じゃあ、お前俺達の所に来ないか？」

「は？」

全身が何言つてんだコイツ？みたいな顔になる。

「いや、だつてさお前親が戦争で死んだんだろ？」

「だつたらや、そんな力を持つてゐなリJの戦争早く終わらじ
ちまおひがーーー！」

ふむ、完全に騙されたな。（黒笑

だけど、それは良いかもしけない。コイツらと行つたら沢山の戦
場を渡り歩くだろう。

そうしたら悪意の欠片と出逢つ可能性も上がる。

しかも原作にも見た感じかなりの悪意があつたからな。

今の俺でさえJになにボロボロになつてゐるのにネギ勢が戦つたら
絶対死ぬ。

だったらここで原作に關わる布石を打つておるのが良いか、

「よし、その申し出受けよつー。」

「ホントかー?。」

「男だ」「言は……無こと。」

「いや、間が長かつたのですが本当に良いいのですか?。」

「何回言わせんだ、大丈夫だよ」

「それならば、自己紹介しておこうかの、ワシの名はフイリウス・ゼクトじや。宜しくの」

「はあ、ナギの行動には毎度の事が頭が痛む……、私の名は近衛詠春だ宜しくたのむ」

「では、改めて私の名前はアルビレオ・イマです宜しくお願ひします」

「俺の名前はナギ・スプリングフィールド、千の呪文の男だ!!」

「じゃあ、俺もだな、俺の名はハ咲悠介、俺の職業は魔法使いだ」

「ひつして俺は紅き翼に入つた。」

どうでしたでしょうか？

感想を送ると真っ白い布は狂喜乱舞します。

批評も受け付けてあります。

四話四（前書き）

「え、うわ、こんなに汗ばむ。
真っ白い布です。

「Jの前PV2500、ニーク800突破致しました。
正直かなり驚きました。
このような駄文ですが。
どうぞ、これからも宜しくお願ひします！

ある自然地帯に喧騒が響く。

そこでは紅き翼のメンバー達が鍋料理をしていた。

sideハ咲悠介

何か、どつかでキングクリムゾン……って聞こえたな……幻聴か?

まあそれは置いといて、今、俺達は鍋を作っている。

鍋か……久しぶりだな。

前世と併せてもほとんどしなかつたからなあ。
懐かしい……。

「」これが旧世界の日本の鍋料理つてやつかあ。じゃ、早速肉を~

「あつ、ナギおまつ……何肉を先に入れてるんだよ~」

「トカゲ肉でもいいのかのう?」

何でトカゲ肉?チャレンジャーダな、ゼクト
そついや、トカゲと言えば

「真つ黒な龍の肉は美味かつたなあ」

「それって、黒毛魔龍じゃないですかね?」

何、その神戸辺りの卸売り市場で売つてそつなのは。

とか言つてゐる間にナギが鍋に肉を放り込んでいく。

「バツ、バカ火の通る時間差といつものがあつてだな」

「うつせーぞえーしゅん」

「フフ、詠春知つてますよ日本ではあなたのような者を……【鍋將軍】と呼び習わすそうですね」

何でコイツ奉行の上の奴知つてんだ?あんまり使わない筈なんだ
が……?

(グーグル先生に聞いたりましたb y作者)

何だ、また幻聽か?疲れてんのかな?

と、考えてる間にナギとゼクトが驚いていた。

「ナベショーグン!?

「つ……強そうじやな」

間違つてはないんだが……何でそんなに驚くし?

「わかつたよ……詠春俺の負けだ今日からおまえが鍋將軍だ

「全て任す。すきにするが良い」

「良かったな、鍋將軍だつてよ、これなら鍋奉行なんて目じゃな

いな！」

「あるのか？鍋将軍つて？」

あるひじこよ。他にもアスク代官とかも。

「おおなんじゅうのコース皿こだわ？」

「ホントだつめえつーつー」

「いわじゅが日本の誇るじゅうわだよ」

ああ懐かしいなあ……。こんな皿こじゅうわは久しぶりだなあ……。

「何で悠介は泣いてるのですか？」

「わあ？ 知らね」

ああマジで皿こなあ。いれにふがあつたら文句なしなんだが。

「それこしても本物皿こな」

「ああ、姫子ひめこも食わしてやつたこへりこの皿れだな」

「姫子？ 誰だよ？」

「オステイアの姫御子の」とじゅ

「へー」

「まあ……戦が終われば、彼女を自由にする機会も掴めるやも……」
です

「何だつけ？監禁みたいなのをされてるんだつけ？」

「その戦だがな……やはりどうにも不自然に思えてならない」

「何が？」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだらうが、鳥頭」「

確かに言われてみればおかしいな。

状況が悪くなつたら激戦区に向かわされるのに、
状況が良くなると辺境に飛ばされる。
まるで戦争を長引かせて「おこなギ、肉ばっか食べるなよ」

何だと！？」

「いいじゃんか、食べたいんだから～」

駄々っ子かお前は。つてさうじやなくて。

ヒューン

「おいナギ、俺にも残し「ドガーン」とか……み……

あ、ありのまま起つた事を話すぜ！？鍋から肉を取ろうとしたら剣が落ちてきて箸が空を切つたばかりでなくその影響で飛んだ鍋は詠春の頭に行つたんだ！何を言つてゐのかわからん

ね（「」y

てか俺の肉があ！！

「食事中失礼~~~~~ッ！
俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
いつちょやろうぜッ！！」

「なんじゃ？あのバカは」

「帝国のつて訳じやなさそーだな」

今俺にはそんなの聞こえない！！今一番大切なのは。

「おい！ナギ、ゼクトー！俺にも下さいお願いします」

ナギとゼクトーは肉だけだが取っていたので懇願することだ！
アル？あいつにそんな事したら何言われるか解らんわ！！

「「だが断る」」

育ち盛りなのに！！

「おい、大丈夫かえいしゅ…むおー？」

「フ…フフ……。」

詠春は鍋を被りながら笑っている。

「てか肉が取れなくなつたのつてアイツのせいだよな！？」

ヒヤツハーーー！アイツぶち殺すーー！略してぶち口ローー！」

某とんがり頭の校長の口癖がでた。

「食べ物を粗末にする者は……」

「ビートー来ねーのかあーー来ねーなら」つちからいく「サン
ツーー」

詠春はテカンの剣を真っ一つにする

一
おほ

- 朝る

一ヒヤッハー！！！俺も濕せろ！！！ふち玉ふち玉！！！」

俺はそう言いながら近づき、戦闘が始まつた。

「…井やテが変わつてますよ」 悠介

知るか？！

「ちよつタンマタンマー！ あんたマジでつええな。 ちよい待たね？」

ジャック・ラカン（以下ラカン）は青山詠春（以下詠春）の剣戟を避けながら語つ。

s i d e 第三者

「ふざけるなつ……やる気なら本氣を出せ貴様つ！」

更に詠春の剣戟の威力が増す。

その応えにラカンは口元を上げて言つ。

「へつモーすか。けど5対1だし本氣出す訳にもいかんのよね。あんた達の情報はリサーチ済みだぜつ！？」

そう言い、4つのカプセルを詠春に投げる。そのカプセルの中から全裸の美女が沢山現れる（口リも完備）。

「情報その一生真面目剣士はお色氣に弱い」

「くつ……卑劣な。いやなんのこれしき心頭滅却すれば火もまた「ドガソーン！」ぐおう！？」

「結局惑わされてんじやねえか……寝てろてめえは……」

そう言い悠介は詠春を吹き飛ばした。鬼畜とは云ひづことなのであるひつ。

「情報その5地味ガキ、またの名を【正体不明】『イマジン』

【目立たず、騒がしく】『スーパー・ジミー』

【流星の使い手】『シュー・ティングスター』

特徴：地味、弱点が無い。」

「地味地味言つなああああああああああああああああああああああ！」

地味な事に関しては結構自覚しているようだ。

「つねついては【正体不明】『イマジン』は氣も魔力も使わずに攻撃を繰り出すので正体不明の力を使っていると言つことから付けられた。

【目立たず、騒がしく】『スーパージニー』はほぼそのまままで割愛させて頂く。

そして、【流星の使い手】『シユーティングスター』は基本的にメテオレインを詠唱しながら戦つのでついた名だ。

「！」のクソ筋肉達磨！－絶対許せん－－ぶちコロぶちコロ－－！」

－連弾ファイガー

「うお－－－氣合い防御－－！」

しかし、悠介の猛攻は終わらず、

「置み掛ける－－！」

－コラプス－

悠介の前に魔法陣が広がり、

「消し炭になれ－－！」

極太のレーザーが射出される！

ズドオオオオオオオオオオオン――――――――――――――

と、言い懐介は馬鹿でかいクレーターを作ったにもかかわらず涼しい顔をして……いや、少しやり過ぎたと後悔している顔をして帰つていつた。

その後、ラカンが起き、ナギと10時間戦つた末に仲間になつた。
その後、悠介は頭痛が酷くなつていた詠春の愚痴を聞いていたといふ。

「 いろんな事子供にやりますなよ…………」

四話目（後書き）

どうでしたでしょうか？
良ければ感想を貰えたら駄作者が喜びます。

五 話題（前書き）

30分間に合わなかつた……！

こんなのは今日も、駄文ですが宜しくお願ひします。

ある大橋に怒号が挙がる。

そこには、人間と亜人が対立しあう二つの軍隊と、その内の人間の方の軍隊にいる紅き翼の面々が戦っていた。

○○○○○○○○

ヒアロガ

ゴオオオオオオオオ！――――！

大きな竜巻が発生し、兵をなぎはらつ。

連発ホーリー

ヒュオオオオオン…………
バシュン！――バシュン！――バシュン！――バシュン！――

天から光が落ち、宙に浮く戦艦を貫き落としてゆく。

「はあ、やっぱり人を殺すなんて慣れないもんだね。慣れたくないけど」

「この惨状を作り出している悠介は言つ。

「そら、凍てつけ」

連弾ブリザラ

ヒコンヒコンヒコンヒコンヒコン…………

氷弾を多数発射して周りを凍らせる。

「それにしても今日は何か嫌な予感がする（ズドオオオオオオオン
！…）…………フラグでしたか」

戦場のど真ん中に白い十字状のエネルギーが発生し、
敵であるヘラス帝国、味方であるメガロメセンブリア連合の兵達
を消し飛ばした。

「！」の攻撃…………、「うえ、あいつかよ…………」

悠介は心底嫌そうな顔をする。
しかし、瞬時に表情を引き締める。

「しゃあねえな…………、叩き潰しに行へか！…」

そして、悠介は飛んでいった。

白の甲冑を着込んだヒトが嘲笑う。

「ファツファツファツファツ。これこそまさに無力だな」

その言葉に怒ったのが、一、三人の兵士が突っ込んでくるが、

一
無駄だ

目の前は赤い紋章を発動させ兵士の攻撃を防ぎ

手も足も出まい！」

ハリケーン

自分を囲むよに巻きを発生させ他の兵士も巻き込み吹き飛ばす！

一
ふん
無様だな

そう言ひ、残つた死体を一轟し、祟を去すが、

連弾ファイラ

「む！」

ターンガード

突如飛んできた炎弾に驚きながらも赤い紋章を出して防ぐ、しかし、

「本命は」つちだよ……」

後ろに回り込んでいた悠介が

纏い・ブリザラ

氷を纏つた拳で吹き飛ばす！

「ぬぐうー？」

「そらー。」れもくらえー。」

ウオタラ

ザアアアアアアアアアー！！！！

魔法によつて発動した水が押し流す！

「ぬうんー！」

しかし、それは途中で防がれ水は霧散した。

「おいおい、ラ系魔法吹き飛ばすつてどいつこいつた

「ファツファツファツ。この程度か？小僧」

「小僧って言つた。

俺にはハ咲悠介って言つ名前があるんだよ」

「ファツファツファツ。」

「ファツファツファツ。

じゃねえよこの野郎、てか腹立つなその笑い方

あまり真剣さが感じられない掛け合いだ。

「はあ、まあいいやそれより、」

メテオレイン

ギュウウウウウウ

「むつ……はあつ……」

オールガード

ドォン……ドォン……ドォン……ドォン……

天から星が大量に降り注ぎ、煙が立ち込める。

ウイング

そして悠介が風をおこし、見えたものは

「ファツファツファツ。驚いたぞ。小僧……いや、悠介か。

興味が沸いた、名乗らせてもらひや、私の名はエクステスだ」

そこには、傷一つないエクステスの姿があつた。

「……反則じゃね？それ」

悠介は冷や汗を書きながら言つ。

「ファツ ファツ ファツ。」

そんな事より良いのか? ほうつとしていて」

「ちゅ？ ッ！ ーー やべつーー！」

バチバチバチバチバチ

サザンクロス

「！」

シリ

ドオオオオオオオン――――――――――――――――――――

その光景を見てエクスデスは感心したように頷く。

ふね、どちらの判断として出上出来といえようか」

連弾ファイラ

「温い」

ターンガード

エクスデスは赤い紋章で易々と防ぐ。そして
しゃくうは

バシュンバシュンバシュン！－！－！

エクスデスは三連続で真空の衝撃波を放つが、

連弾ブリザガ

氷弾で相殺される。

その間に悠介は空に飛び、態勢を整える。

「やめてさて、どう攻めようかね……」

表情では余裕そうな顔をしているが、悠介は内心かなり焦つていた。

しかしそれも仕方のない事だろう。何故なら自分の攻撃は全く効かず、その後のカウンターがかなりの確率で当たつてくるのだから。ならば、取れるべき行動は唯一つ

「相討ち覚悟、耐久勝負の真っ向勝負ってどこか……」

チツと舌打ちをする。

「（面倒くせえ、だけどやんなきゃ なあ……）」

「（はあ、痛いのは嫌なんだがなあ……、しゃーねえ……行くか）

」

そして悠介はエクステスに魔法を放ちながら飛来していった。

お楽しみいただけただでしょうか？

六話目（前書き）

テ、テストが終わりましたので投稿します……。

へ？ で、あれはどれくらい？

HAHAHA、わ、わ、わ、わ、たじやないですか

終わりましたので、

では、お楽しみ下さい。

六話目

ある大橋に爆音が鳴り響く。

そこでは、八咲悠介とエクスデスが戦っていた。

○○○○○○○○○○

ブリザガ

ファイガ

サンダガ

上位魔法の連発による魔法の嵐がエクスデスに向かって放たれる
が、

オールガード

その一つの行動で全て防がれる。

そして、

「トドメだ！！」

グランドクロス

バリバリバリバリ

悠介の周りを黒い球体が回り、

ズガーン！――――――――

無の力が進る！

一シェル

「ぐつがあ！――

とつさに防いだが悠介は吹き飛ばされる

しかし、吹き飛ばされながらも

一サンダガ――

魔法で応戦する！

バゴオオン！――――

「ぬぐつ！」

エクステスの頭上に発生したが雷の余波でエクステスを吹き飛ば

す！

そして、サンダガを放ち体制を整えた悠介はエクスデスの周りを回りながら、

ホリ

追い討ちをかける！

ヰエオオオオオオオ……ズドオオオン！――――――――――――

一
九八

エクステスは吹き飛ばされる

「ふう、と二つ？ 効いたか？」

土煙がエケヌテヌを隠す中
您介は悶々として言ひか

「ファツ ファツ ファツ、 まだまだ」

煙が晴れた先にいたエクスデスはかなり余裕な表情をしていた。

「おこねこ、めじかね……」

「ファツファツファツ、この程度ではやられはせん」

「バグキャラめ……」

「Jの時どJかの赤髪と筋肉達磨はくしゃみをしていた。

「つたぐ、今はあんまり時間かけたくないんだがなあ

溜め息を一つ吐き悠介は考える。

「（やうさて、どう攻めようか。下手に攻撃すると痛いカウンタ一喰らうしなあ）」

と、そう考え事をしながらエクスデスが牽制の為に放つてくる攻撃を相殺や回避をする悠介もバグキャラなのだろう。

「うつ、やつぱりジリ貧だな……」

「ファツファツファツ、ビーフした?こんなものではないだらつ。」

「当たり前だコノヤロー」

そして、悠介は構える。

「（じょうがねえ、ダメージ覚悟の近距離戦だ!）

一連弾ファイラー

悠介はエクスデスに魔法を放ちながら接近する。

一ターンガード

しかし、エクスデスは赤い紋章を出し、防御する。そして、

「アルマゲストー

エクスデスは周囲に無の空間を作り、攻撃する。

バキン！――

「ぐつ――」

しかし悠介はギリギリで回避し、攻撃する。

「連弾ブリザラー

「ぬぐつ――？」

氷弾がエクスデスに命中し、エクスデスの足を凍らせる。そして悠介はその隙を逃すはずもなく、

「纏い・ファイガ―

右手に猛る炎を纏わせ

「おーりああああああ――――――――――――

殴り飛ばす！

ズドオン！――

「ぬぐう……！」

エクスデスは飛ばされる。

「休む隙なんぞ」「えねえ……！」

一メテオレインー

「ぐつ……！」

一オールガードー

エクスデスは降り注ぐ隕石を防ぐために最強の障壁を展開させる。しかし、悠介の猛攻は終わらない！

「おおおおおお……！」

一纏い・ファイジャー

悠介はエクスデスを肉薄にしながら、自分の出せる最高威力の炎の魔法を右手に纏い殴るが、

バリバリバリバリバリバリバリ……！

エクスデスのオールガードに阻まれる。しかし

「砕けろおおおおおおおお……！」

バリバリバリバリバリバリバリバリ……！

悠介は、それでもまだオールガードを貫かんと前に進む！

バリバリバリバリバリバリ
……！

そして

ハリハリハリハリハリハリッ……ヒギッ!!

- 10 -

今だ！」

悠介は自分の攻撃の威力にオールガードが押し負けてきた事を理解し、

「貫けええええええええ！」

全身全靈で前進する！

しかし、それはエクスデスも同じ事であり、

「せせらぎ」

オールガードに魔力をこめ続ける！

そして、

バキッバキバキバキッバリイン！

「何つ！？」

オールガードは碎かれた！

悠介の拳は吸い込まれるようにエクステスの腹部に入り、

スドオオオオン――――――――――――――

ファイガとは比べものにならない程の圧倒的な炎の激流がエクス
デスを焼き尽くす！

「 ੴ ਸਤਿਗੁਰ ਪ੍ਰਸਾਦਿ ॥ ਸਤਿਗੁਰ ਪ੍ਰਸਾਦਿ ॥

ドンッ、ズザザザザザザ

「ふう、焼き加減はミディアムレアってか?」

悠介は勝利を確信したように言い、

そう言つて消えていった。

○○○○○○○○

「……ふいー、危なかつたー。あのまま弾かれてたら死んでたなー。」

と、軽く言つてゐるが、実際悠介の体はガードした時に殺しきれなかつた衝撃等でボロボロになつてゐる。

「あー、これやべーなー。血が足りん。骨も折れてるし……」

「おーい！ 悠介ー！ 大丈夫かー！？」

「おおナギか、これが大丈夫に見えるなら病院に行くことをお勧めする」

と、悠介は戦いが終わつたのか近寄つてきたナギに言つて、

「あー、やべー、やべーぜこれ、意識保つのもキツー。」

「いや、全然余裕そりじやねえか」

と、ナギと一緒に居たラカンも言つ。

「いやいや、ホントだつてマジでヤバいんだつて……」

「あ、ここマジだったのかよ。」

「マジだつて言つただろ」ノハヤロー。あーもーせ、ベゼへ眠く……な
つて……きた

「お、おい！悠介ーー寝るなーーおいラカン！アルかお師匠連れ
てこいー。」

「あははー、何か白い服着た人が見えてきたぜー」

「ねむねー」

「ちよつ、マジでヤバそうだ! ラカン! 早く戻つて! いい! 」

こうして、グレートブリッヂの死闘は終わつた。

「天使さん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8294t/>

魔法先生ネギま！－最終幻想の魔法使い－

2011年10月9日04時49分発行